

57 雀宮宿 ~ 宇都宮宿
 栃木県宇都宮市
西原 ~ 宇都宮宿
 (歩行距離 2056m 26分)
 歩く地図でたどる日光街道
<http://nikko-kaido.jp/>
<http://JZE00512@nifty.ne.jp>



宇都宮城址



一向寺

一向寺
 境内に阿彌陀堂があり、銅像阿彌陀如来座像が安置されている。この像は、応永12年(1405)の製作で、「汗かき阿彌陀」と呼ばれ、大事件が起こる際には汗をかくと伝えられている。国指定重要文化財。



熱木不動尊

熱木不動尊(ねぎふどうそん)
 「糞木町(にえきまち)持宝院持。此不動は宇都宮朝綱の建立なり」と云(日光道中略記)宇都宮宗円が康平2年(1059)、多気山上に布陣したとき、戦勝を祈願して造った三体の不動尊の一つ。



子安地蔵

子安地蔵尊
 宇都宮城主であった戸田氏の守り地蔵といわれる。子育て、安産の地蔵尊として、子どもの成長と健康、家内安全を守護している。



台陽寺

台陽寺(たいようじ)
 慶長10年(1605)建立。かつては、この付近に多くの寺院が配され、宇都宮城下入口を固める防衛戦の役割をたした。戊辰戦争で戦死した宇都宮藩士の墓「重寛素静居士」がある。

旧歌ノ橋番所跡
 昔、仕丁(律令時代雑用をしていた者)が歌を詠みその歌が万葉集に載ったことから橋を「歌ノ橋」といふようになり、町名も歌橋町になった。

寺町城郭
 このあたりに地蔵寺、大慈院、栄林寺、万松寺、松岩寺など多くの寺院を配置し、宇都宮城の南の入口を固め出城の役目をし、敵の侵略を防ぐ目的があった。そのために寺の周りを囲む塀に鉄砲狭間や矢狭間を作り、城郭の一部としていた。

新町のケヤキ



新町のケヤキ
 推定樹齢800年とされ、樹高約40m。宇都宮城下の南口の目印であった。

宇都宮宿南の入口
 この碑のある場所が宇都宮宿の南の入口で、木戸・土塁・番所があった。番所は明六つから暮六つまで開いていた。また、このあたりまで松並木が続いていた。

蒲生君平勅旌碑

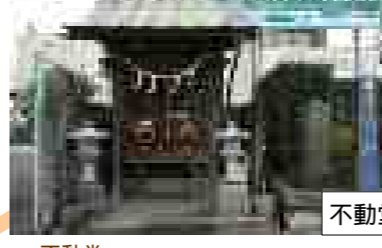
蒲生君平勅旌碑(がもうくんぺいちよくせいひ)
 明治天皇の命により、宇都宮藩知事の戸田忠友が明治2年(1869)に蒲生君平の遺功を追賞し建立。蒲生君平は林子平、高山彦九郎とともに寛政の三奇人といわれ明和5年(1768)に宇都宮で生まれ、学者・尊王家として知られている。文化5年(1808)に「三陵志」や「職冠誌」を著した。三陵志は機内を中心とした天皇陵について文献と実地検証に基づいて考証した書。古墳研究の画期をなす書として、その後の三陵復興運動にも影響を与えた。
 蒲生君平の墓は桂林寺にあり、蒲生神社は八幡山にある。

浄念寺
 彰義隊数士の墓 明治27年(1894)に旧宇都宮城南館の地に池上町の貸座敷が移転して来た際、そこにあった墓石を同寺に移したという。
 墓の左側面には、「明治七年四月角田氏、登坂氏建之」、右側面には表面が剥落して読みにくい。「数士の姓名は詳らかならず。戊辰の夏、この地に戦死す。里人これを埋む。七年、敵のために碑を建つ。何となれば恨みのため、幽魂を慰めんためなり」と刻まれている。戦後、地元民によって仮埋葬され、明治7年(1874)に碑が建てられた。
 なお、彰義隊の名が使われているが、宇都宮戦争時に同隊の存在を『復古記』等では確認できない。
 上野彰義隊戦争は5月15日のことであるから、この隊ではなく、2月に結成された彰義隊が間もなく二派に分裂した際、その一部が大鳥軍に合流したのたろう。

旧奥州道
 不動前を右に、川の手前を川に沿って北上する、下河原築瀬村、宿郷村、押切、上河原を経て博労(ばくろう)町に至る。
 宇都宮城主戸田氏別邸跡「御小屋敷跡」で周囲を一望できる宇都宮一の景勝地であったという。ここから下河原へ向かう道が旧奥州道である。

七水・七木・八河原
 七水は追手向井、明神井、亀の井、いなゝきの井、滝の水、二字の井、正庵の井。
 七木は七かまど木、うつみの桜、塩蔵桜、普賢そうぎ、亀井櫻三株。
 八河原は七里河原、北河原、下河原、最上河原、専阿彌河原、中河原、安蘇河原、上河原。これらを日光道中略記では挙げている。

奥州街道追分
 「往古の奥州街道は石橋宿の東、上三川より込宿入口不動堂の前を経て下河原神明の辺にかへり、城内に入り上河原小袋町に出、今泉村に達せしを、元和年中(1615~24)南新町通に往還をひらき、日光・奥州の両道に定られしと云(日光道中略記)昔の奥州街道は不動堂前から北東に向かい、田川の西沿いに進む道筋である。



イヌツゲ

イヌツゲ
 樹齢約300年、樹高約8.5m、5~6月頃に小さな花が咲く。普通あまり大きくならないので庭木として育てられています。これほど大きいイヌツゲは大変珍しい。

本多正純と釣天井事件
 本多正純配流の理由となった釣天井事件。寛永13年(1636)家康21回忌に日光参詣をする家光を暗殺しようとして、家光の泊まる宇都宮城の部屋に釣天井を仕掛け、発覚したというがこれは伝説で、2代将軍秀忠の姉で、正純の前に宇都宮城主であった奥平忠昌の祖父信昌の室加納殿に、正純が恨まれたのが原因という。元和8年(1622)、秀忠が日光社参の帰途、宇都宮による予定だったが、加納殿が「正純の謀反の兆あり」と密書を届けたので、秀忠は宇都宮に寄らずに帰った。それが脚色されたものらしい。しかし正純は宇都宮家に入っているのに加納殿の策略であると考えられる。

宇都宮宿の飯盛女
 江戸時代の旅籠には、飯盛女を置いた旅籠が多かった。幕府の正式の法令では飯売女(めしうりおんな)である。天保年間(1830~1844)には、飯盛女182人のうち39人が子供とある。嘉永年間(1848~1854)には、45軒の旅籠のうち42軒が飯盛旅館で、平旅館はわずか3軒であった。
 この子供というのは幼少の者で、子守などをして何年後に、「食売女」となるもので、台所仕事を「水仕(みずし)」、給仕などを「出居女(でいおんな)」としても使われてきた。彼女の親は貧困のために子供を身売りし、その身代金は3両から5両だった。年齢や容姿などに応じ、もっと高額の者もあったが、飢饉の時には1両から何百文で幼少の娘を手放すこともあったという。何とも、心痛い話だが、このような場合、親が助かるというよりは子を餓死させないための苦肉の選択であったことが多い。(日光道中略記では大高利一著より)

宇都宮城址
 城は宿の南にあり。本丸・二丸・三丸。内外の郭、外部には西原口・歌橋町口・佐野口・材木町口・伝馬町口・新町口・不動口・大手門・今小路門・下河原門等の門、八の檜台あり。当城のさまは四方いづれのところよりのぞみ見るといへども、楼櫓倉庫まで古木深樹に屏翳して其形勢をうかがひがたし。これその要害の処置なりといふ、そのありさま亀ヶ城と呼なせり。又不動城とも唱ふ(日光道中略記)
 天慶3年(940)藤原宗円(ふじわらのそえん)宇都宮氏の初代当主)が宇都宮に移住し築城した。宗円は比叡山(あるいは石山寺)座主で、奥州の阿倍貞任・宗任追討をし、宇都宮の守護職に任じられ、子孫は宇都宮氏を称した。以来、宇都宮氏の居城。
 天正4年8月7日(1576)、父・宇都宮広綱の死とともに22代目を継承するが、年少であったことと父の死に付け込まれて、後北条氏などの侵攻を受けて、大谷の多気城に移動した。
 天正18年(1590)、豊臣秀吉の小田原征伐に参陣、石田三成の指揮した忍城攻撃などに参加し、下野国18万石の所領を安堵された。その後は秀吉に従い、文禄の役にも参陣している。
 慶長2年(1597)、後北条氏を滅ぼした豊臣秀吉は宇都宮城に入り、「宇都宮仕置」を行い関東・東北地方の大名の配置などを決めた。宇都宮氏の所領は没収となり、宇都宮家は断絶した。
 城地は浅野長政の預かりとなり、のち蒲生、奥平を経て「元和5年(1619)本多上野介正純に賜にけるが、同8年改めて奥州に配流せらる(日光道中略記)
 城主となった本多正純は、将軍が日光社参で宿泊するための御成御殿を本丸に建て、堀や大手門を整備するなど城の大改修を行い、城下町を整備して、現在の宇都宮市街地の基礎をつくったが、元和8年(1623)出羽に配流となった。
 その後、奥平氏、松平忠弘、戸田忠真、松平忠祝と続き、安永3年(1774)戸田忠寛が没して明治に至る。
 慶長4年(1668)、宇都宮城は戊辰戦争の激戦場となり、旧幕府軍と新政府軍の攻防の結果、土塁や堀の一部を残し落城炎上した。
 その後、市街地化が進み、城の往時を偲ぶものはほとんどなくなってしまったが、現在、本丸の堀・土塁・櫓などが復元され、城址公園になっている。

英巖寺(えいがんじ)
 英巖寺は城内にあり。禅宗京都妙心寺の末。城主戸田家の菩提寺なれども城主遷替の時はともに移転する例なれば、永く此寺号を存するにあらず。故に松平主殿頭城主の時本興寺と号せしといふ(日光道中略記)明治以後、江戸の戸田家菩提寺松原寺から、ここに改葬した。
 宝永8年(1711)に戸田忠真が宇都宮城主となった際に、越後高田から移築した寺。戊辰戦争で焼失し廃寺となり、報恩寺に合併された。寺跡には正面には、46代宇都宮忠恕の墓(最後の城主)の墓がある。左奥には、尊次に忠明まで11人の名前が刻まれた大きな墓碑がある。

英巖寺
 英巖寺(えいがんじ)は城内にあり。禅宗京都妙心寺の末。城主戸田家の菩提寺なれども城主遷替の時はともに移転する例なれば、永く此寺号を存するにあらず。故に松平主殿頭城主の時本興寺と号せしといふ(日光道中略記)明治以後、江戸の戸田家菩提寺松原寺から、ここに改葬した。
 宝永8年(1711)に戸田忠真が宇都宮城主となった際に、越後高田から移築した寺。戊辰戦争で焼失し廃寺となり、報恩寺に合併された。寺跡には正面には、46代宇都宮忠恕の墓(最後の城主)の墓がある。左奥には、尊次に忠明まで11人の名前が刻まれた大きな墓碑がある。



英巖寺

宇都宮城主戸田氏の墓
 宇都宮城主戸田氏の墓は、英巖寺境内にあり。寛政11年(1799)に建立された。墓は高さ約50cmの石塚。不動堂がこの付近の地名の由来となった。後に糞木不動尊(ねぎふどうそん)のある持宝院に移された。

宇都宮城主戸田氏の墓